

映画「青～CHONG～」からみる 在日朝鮮人3世の自己アイデンティティ

朴東鎬*

(e-mail : parkdongho@msn.com)

<目次>

- | | |
|-------------------|-----------------|
| 1. はじめに | 3. マイリティとしての在日方 |
| 2. トランスナショナルな在日3世 | 4. おわりに |

キーワード：在日朝鮮人(Zainichi), 李相日(Lee Sang Il), 青(Chong), 日本映画(Japanese movie), 自己アイデンティティ(Self-Identity)

1. はじめに

本稿の出発点は、近年在日朝鮮人(以下、在日)¹⁾社会の中心となっている在日3世たちがどのように自己アイデンティティを構築していくかを問うことにある。そのため、自身も在日3世である李相日(이상일)が朝鮮学校を舞台に製作した自己表現映画「青～CHONG～」(1999)²⁾を通して3世たちの自己アイデンティティを考察したい。

社会学や文化人類学において、アイデンティティは先天的に備わるものではなく、当該人物が位置する社会制度や他者との相互作用の中でその都度構築されていくものとして捉えられている。³⁾すなわち、アイデンティティというのは「社会的コンテクスト」や「他者との関

* 慶尚大学、講師、戦後日本映画

- 1) 本稿で言う在日朝鮮人は国籍や政治的理念の如何に関わらず、植民地時代に渡日し朝鮮半島にエスニックなルーツを持つ人々とその子孫たちを指す。
- 2) この映画のタイトルである青は多層的な意味を持つ。一つは日本社会で在日に対する蔑称である「チョン」及び「チョンコ」。もう一つは韓国語で「青」を表す「チョン」と日本語で「青春」の「青」の意味が含まれている。梁仁實(2003)「戦後日本の映像メディアにおける「在日」表象－日本映画とテレビ番組を中心に」立命館大学大学院博士論文、p.113。
- 3) 土屋明広(2008)「日本社会における在日アイデンティティ(被)構築性－アイデンティティ構築における法的支援に向けて」『岩手大学教育学部年報』第68巻、岩手大学教育学部、p.10。

係」によって構築されるのである。在日の場合「他者との関係」が自己アイデンティティの構築において支配的な要素である。彼／女らにとって「他者」というのは、自分のルーツである「祖国」と生まれ育った「日本」であり、この二つとの出会い、葛藤、妥協、調整などによってアイデンティティが構築されるのである。4)事実、在日のアイデンティティはこの二つの他者との関係によって世代別に大きく変容されてきた。ここで、世代別に見る在日のアイデンティティについてふれたい。

まず、日本の植民地支配を直接経験した1世たちは戦後も続いた日本社会の差別と抑圧を受けてきたため「民族的誇り」と強い「回帰性」を持っていた。特に、彼／女らにとって民族的誇りは差別社会日本に対抗する一つの手段であったため、「帰化」というのは「エスニック・アイデンティティの喪失」を意味していた。多くの1世は在日本朝鮮人総聯合会(以下、朝鮮総聯)や在日本大韓民国民団(以下、民団)などに加入し、自分が所属した組織の秩序により自我を同一視していた。何より1世たちは、いつか必ず帰国することを前提としていたため、アイデンティティについて悩む必要はあまりなかったのである。

それに対し、日本で生まれ育った2世の場合、成長過程で自分が朝鮮人であることを自覚し、混乱の時期を経験せざるを得ないが、在日朝鮮人史や祖国の実態を知ることを機に民族的自覚を得て韓国人(あるいは朝鮮人)としてのアイデンティティを構築する人が多かった。例えば、1970年代韓国の反独裁民主化運動を展開した韓国民主統一聯合(韓民統)や北朝鮮の「公民」という立場から分担された祖国の統一のために活動していた朝鮮総聯の2世たちが代表的である。彼／女らは在日韓国人(あるいは在日朝鮮人)としての生き方を選び、民族性を保って生きようとしたのである。

しかし、戦後の世代である2世たちが在日社会の中心となった1970年代以降、在日社会ではそれまで抱いていた理念や価値観の転換期を迎えることになった。当時、在日社会では「在日の在り方」と「未来に向けた取り組み方」を模索する動き、言わば「在日論」が論議の中心に据えられていた。5)特に、韓国の民主化実現や経済発展によって新たな韓国観を形成した在日は民族や国家、統一などといった言説に拘泥せず、日本での「定住」を前提とする「在日志向」に基づいて自己アイデンティティを構成することになった。また、この時期に「第3の道」6)を主張する論調も高まり、1980年代以降になると定住

4) 윤건차(2002) 「21세기를 향한 '在日'의 아이덴티티 : '관계성'의 모습」 『근·현대 한일관계와 재일 동포』, 서울대학교출판부, pp.292-293 ; 이승훈(2006) 「일본에서 '재일한국인'으로 살아가기」 『현상과 인식』 제30권 제1호, 한국인문사회과학회, p.84 再引用。

5) 水野直樹、文京洙(2015) 『在日朝鮮人一歴史と現代』 岩波書店、p.200。

6) 第3の道の定義は論者によって少し異なっているが、在日学者尹建次(윤건차)の定義が最も分かりやすい。彼に

を前提とする在日の生き方は現実化されていった。7)このような変化の中、1世たちの「祖国志向」とは異なる未来像を構築した2世たちは、日本社会の市民という立場から民族差別と闘う連絡協議会(民闘連)などを発足させ、共に生きられる社会の実現を目指す「共生志向」的な数々の市民運動に取り組んだのである。

一方3、4世が在日社会の主軸となった現在、彼／女らのアイデンティティは旧世代とは異なる傾向を見せている。2世までは民族意識を持ち、祖国との連帯を通して自己アイデンティティを構築していた。しかし3、4世の場合、そのような言説から離れ「個人」を中心に置いて自己アイデンティティを再構築する機会が多い。多様化・多元化されているアイデンティティを福山安則の「在日若者世代のアイデンティティ構築類型分類」⁸⁾を借りて言えば、三世の場合旧世代の「共生志向」、「祖国志向」、「帰化志向」などではなく、個人的成功の追求のかたちをとり、ゆくゆくは「コスモポリタン(Cosmopolitan)」もしくは「自由人」としての生き方を模索する「個人志向」が主流になりつつある。

このように世代交代を背景に多様化・多元化されてきた在日の自己アイデンティティは、彼／女らが製作した多くの芸術テキストから窺うことができる。特に、1970年代以降登場した在日の映画人たちは、祖国分担という政治的な状況と戦後日本社会の差別の中「民族的マイノリティ」として浮遊する自画像を収めてきた。これらの作品は、在日の歴史性と存在性が含意されている点から「記録史料」としての価値があるとされている。日本の学界においてもカルチュラル・スタディーズやポスト・コロニアリズム研究の多様化と共に、映像テキストにおける「在日の表象」を学問の対象とする試みが徐々に増加しつつある。⁹⁾韓国でも2000年以降、在日を主体とした様々な映像テキストが公開され、在日の表象を分析する試みが始まっている。これらは植民地支配の産物であり、戦後韓日両国の政策によって疎外されてきた在日の存在を見つめなおす新たな機会を与えている。

しかし、韓国の映像テキストの大半はあくまで韓国側を中心ににおいて製作されたため、在日の実状を十分に収めたとは言いがたい。また、関連研究も一部の商業映画や特定の監督

よれば、第1の道は祖国への帰国を前提として生きていくこと。第2の道は日本国籍を取得して日本人として生きていくこと。第3の道は民族性を持ち、祖国統一を志向しながらマイノリティとして生きていくことである。윤건차, 박진우 외 역(2016)『자이니치의 정신사 - 남·북·일 세 개의 국가 사이에서』한겨레출판, p.774.

7) 前掲書、윤건차, 박진우 외 역(2016), p.766-767.

8) 福岡安則は、英国のインド人移民2世のアイデンティティの類型を分析したハトニック(Nimmi Hutnik)のモデルを参照し、在日若者世代のアイデンティティ構築を朝鮮人の被抑圧の歴史の重要度と日本社会における自己の成育地への愛着度に基づき共生志向、祖国志向、個人志向、帰化志向に分類した。これに関しては、福岡安則(2008)『在日韓国・朝鮮人－若い世代のアイデンティティ』中公新書、pp.88-107を参照。

9) 前掲書、梁仁實(2003) p.3.

作品に偏っていて、映像テキストにおける在日の表象研究はまだ始まったばかりであると言える。10)

本稿では、「脱エスニック」で「ボーダーレス(borderless)」的である在日3世の自己アイデンティティを如実に収めている映画「青～CHONG～」に注目したい。李相日が日本映画学校(現：日本映画大学)の卒業製作として作った本作は、独立路線で製作されたため一般にはあまり知られていないが、ナショナリズム視点からニヒリズムに陥ったマイノリティの苦痛をテーマとした既存の自己表現映画とは異なり、3世の存在様相を事実的に収めている作品として高く評価されている。11)しかし、現在に至るまでこの作品について論じられた研究は見当たらない。従ってここでは、この映画に現れた在日の表象及び再現の諸相を考察することにする。特に、多様化・多元化されている3世たちの自己アイデンティティに焦点を当てて彼／女らが祖国をどのように思い、また日本社会で自分をどのように位置づけて自己アイデンティティを構築するのかを読み取ることを試みる。

2. トランスナショナルな在日3世

今まで韓国社会では限られた視点から在日を見ていた。事実、在日は独裁政権を維持したり、あるいは民族愛を涵養させる手段であった。12)しかし、脱冷戦やグローバル化などによって近年彼／女らに対する視点も変わりつつある。特に、ポスト在日世代(Post-Zainichi generation)の象徴とも言える鄭大世(정대세)や秋成勳(추성훈)、秋山成勳などが韓国のテレビ番組にレギュラーとして出演したり、北海道朝鮮初中高級学校を舞台とした「私たちの学校(우리 학교)」(2007)などのドキュメンタリー映画が公開され、植民支配と冷戦の産物である在日を再考させる機会を与えている。

10) 韓国では、在日文学を原作とした映画「GO」(2001)と「血と骨」(2004)に関する研究が大半を占めている。

11) 李相日のデビュー作でもあるこの映画は、第22回びわ湖フィルムフェスティバルのグランプリ受賞をはじめ、第29回ロッテルダム国際映画や第4回釜山国際映画祭に招待されるなど海外でも注目を浴びた。

12) 権赫泰は、今まで韓国社会は在日に対し反共主義(赤)、民族主義(半日本人)、開発主義(成金)という偏狭された視点を持っていたと指摘する。권혁태(2007)「제일조선인과 한국 사회 - 한국 사회는 제일조선인을 어떻게 표상해왔는가」『역사비평』 제78호, 역사문제연구소, pp.234-267. また、趙慶喜は1990年代以降韓国社会の急速な変化のなかで、在日は過去の棄民と監視の対象から支援と連帯の対象へ、また動員と郷愁の対象へと変わってきたが、そこには認識主体としての韓国とその対象としての在日という非対称的な関係性が存在すると言う。趙慶喜(2009)「韓国社会における在日朝鮮人認識の変遷」『クヴァドランテ』 第11号、東京外国語大学海外事情研究所, pp.115-131.

その中でも、2010年ドイツワールドカップで韓国籍を持っているにも関わらず、北朝鮮代表として出場して国歌提唱の際、感極まり涙する鄭大世の姿は韓国社会で大きな話題を呼んだ。彼は北朝鮮代表として出場した理由について「私の心の祖国は北朝鮮であり、かねてからずっと祖国(北朝鮮)の代表になりたかった」¹³⁾と語っている。愛知県出身の彼は小学校から大学まで朝鮮総聯系列の学校に通っていたため、韓国より北朝鮮を自分の祖国だと思っている。それほど彼の成長過程において朝鮮学校で受けた民族教育は大きな影響を与えたのである。つまり、朝鮮学校は祖国を体験したことがない在日3、4世に北朝鮮の「公民」としてのエスニック・アイデンティティを育ませる国家的なイデオロギー装置としての役割を果たしている。

最近韓国社会でも在日に対する認識が変わり、3・1節と光復節になると今まで隠蔽されてきた「朝鮮学校」に関する多くのテレビドキュメンタリーが放送されている。¹⁴⁾これらのドキュメンタリーは日本社会の制度的不当性を訴えたり、あるいは民族差別の中でも強い民族的誇りをもって、逞しく生きる在日3、4世たちの姿を強調している。

しかし、これらの映像テキストが朝鮮学校に通う若い世代を事実的に描いているかについては多少疑問を抱いている。藤井たけしが指摘したように、現在の韓国社会はもはや在日を露骨にパンチョッパリ(半日本人)、すなわち「欠如された存在」としてみることはなくなったが、その代わり彼／女らを「過剰な存在」と見做し、周縁部に固定させたままその「鏡像の効果」として内部的な一体感を想像させているのではないだろうか。¹⁵⁾つまり、韓国の視点から作られた映像テキストでは、肯定的な面のみに焦点を当てて「祖国(韓国)が主体であり、在日は対象という関係性」¹⁶⁾を前提に韓国人の民族愛あるいは祖国愛を高めている

13) <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%84%AD%E5%A4%A7%E4%B8%96>(検索日: 2019.03.06.)

14) 朝鮮学校をモチーフとしたテレビドキュメンタリーは「私は行く、東京第2学校の夏」(SBSスペシャル、2005.09.12.)、「大阪朝鮮学校サッカー部のベスト16を目指す夢」(MBC W、2006.01.06.)「私たちが朝鮮学校に通う理由」(SBSセブンデイズ、2006.03.24.)、「大阪11朝鮮学校サッカー部の物語」(KBSスペシャル、2007.02.11.)、「民族学校に行く」(KBS開かれたチャンネル、2007.03.10.)、「東京第2学校の春」(SBSスペシャル、2007.04.29.)、「在日60年：学校に行く道」(SBSスペシャル、2007.08.12.)、「3.1運動100周年特集 朝鮮学校：在日同胞民族教育70年」(KBS時事企画 窓、2019.03.05.)などがある。조경희(2007)「한국사회의 재일조선인 인식」『황해문화』제57호, 새얼문화재단, pp.59-62の表2000年以降韓国放送3社の在日朝鮮人関連番組を参照。また、韓国映画界でも「一つのために」(2003)をはじめ「私たちの学校」(2006)、「未完成のドキュメンタリーフロンティア」(2007)、「終わらない植民地の歴史そして日本の朝鮮学校の物語—不当、倒れない」(ドキュ創作所、2018)が公開され朝鮮学校に対する関心が一層高まっている。特に、最近朝鮮学校を支援する民間団体「朝鮮学校と共にする人々、モンダンヨンピル」が発足され、朝鮮学校の存在を知らせるため活発な活動を行っている。

15) 후지이 타케시(藤井たけし)(2007)「낮선 귀환: <역사>를 교란하는 유희」『인문연구』제52호, 영남대학교 인문과학연구소, p.37; 前掲書、趙慶喜(2009) p.130 再引用。

16) 前掲書、趙慶喜(2009) p.131.

傾向があると思われる。

事実、在日の映画人が製作したり、在日文学を原作にした映画ではそのような民族意識は探しにくい。例えば、金城一樹の同名小説を映画化した「GO」などでは、朝鮮学校の民族教育を拒む生徒たちの姿が赤裸々に描かれている。現在、在日のエスニック・アイデンティティが徐々に弱化、変化されていることは否定できない事実である。在日社会の一部では、民族や祖国に大した感情もなく、自分が韓国人(あるいは朝鮮人)ということに執着しない人々もいる。¹⁷⁾この映画「青～CHONG～」でもそのような思考が窺える場面を多く発見することができる。

図1. 祖国に無関心な生徒たち



(00:03:43～00:03:52／00:05:17～00:0600／00:21:00～00:21:28)

まず、主人公テソンが社会の授業中に教科書の金日成の肖像画につける草紙紙で顔の脂を拭きとったり、彼の親友ソングが紙で朝鮮企画(北)というミサイルを作って学校の屋上で花火を付けて発射しながら笑いあったりする場面。そして、教室で野球をして黒板の上に飾ってある金日成と金正日の肖像画のフレームを割る場面などは民族教育を拒み、更に

17) 지충남(2018) 「재일한인의 민족정체성에 관한 연구」 『로컬리티 인문학』 제19호, 부산대학교 한국민족문화연구소, p.17.

祖国に対する無関心な彼らの態度を端的に示している。特に、日本人の男と付き合いクラス仲間たちに虐められたナミが「私、チョン高生って嫌い。仲間意識強すぎて、絶対に外のもの受け付けない。いつも自分たちの狭い世界の中だけでモノを考えてる。いつまでこんなこと言われなくちゃならないのかな…」と言う場面には朝鮮学校時代に対する監督の記憶が圧縮されている。偏狭な民族教育を率直に批判するこの一連の場面について監督の李相日は「不良な朝鮮学校の生徒たちのリアリティを表した場面だと思ってほしい。事実、個人的には映画よりもっと強く拒否していた。当時学校生活が息苦しくて常に腹が立っていた」と振り返っている。18)もちろんこのような場面が全ての在日3世を代弁してはいないが、少なくとも世代交代によって変容されてきた在日のエスニック・アイデンティティからすると、民族や祖国という言葉は彼／女らが生きている現実とはほど遠いものであることが窺える。

過去在日1、2世にとって民族と祖国に対する一体感と感情は日本社会の差別に抵抗する一種の信念であった。その多くは民団と朝鮮総聯に加入し、祖国との連帯を通して民族意識を高めていた。彼／女らにとって祖国というのは観念的な概念ではなく、日常生活と密接な関係性を持つ概念であった。朝鮮籍なのか、それとも韓国籍なのかという国籍問題。そして、これに基づいた祖国訪問や旅券問題などについてはとても具体的で厳格な問題として受け入れていた。19)

しかし、世代交代が進む中でそのようなアイデンティティは時に桎梏となり、「自己を抑圧・疎外する機能を果たすもの」になっていった。20)特に、家族からの口述や各種マスコミ、教育などを通して祖国を間接的に経験する3世たちにとって、大いなる私たちの民族や祖国統一などといった言説はあくまで理想あり、決して現実ではない。何より彼／女らは自分自身が関わっている現実を最優先する傾向があるのである。21)

千葉朝鮮初中級学校の校長である金有燮(김유섭)よれば、2016年現在の生徒数は74人で20年前の380人と比べ1/3以上減っていて、その原因は様々であるが、何より「民族性の希薄」と「多様な価値観」が挙げられると言う。22)また、土屋明広が朝鮮学校の

18) 신명직(2007)『제일코리아인 3세의 경계를 넘어』고즈원, pp.165-166.

19) 前掲書、윤건차(2016) pp.608-609.

20) 金泰永(1999)『アイデンティティ・ポリテックスを超えて』世界思想社、p.28；曹慶鎬(2013)「在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティの多様化に関する調査研究－日本学校在学生と朝鮮学校在学生の比較を中心に」『多言語多文化－実践と研究』第5号、東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター、p.103再引用。

21) もちろん、日本で生まれ育った2世も1世の経験を間接的に体験したのだが、彼／女らはそれを共有し自分のルーツをごく身近なものとして感じていた点から3世とは異なる。

22) 金有燮(2016)「朝鮮学校ではどのような教育が行われているのか－民族教育と地域共生の取り組みについて」『第41回GCI講演会報告』、神田外語大学グローバル・コミュニケーション研究所、p.26.

若い世代のアイデンティティを調査したところ、朝鮮学校の先生は「過去朝鮮学校は在日のエスニック・アイデンティティ涵養の中心地であったが、現在は制度的規制による維持の困難とは異なる側面で危機感を抱いている。それは、生徒たちのエスニック・アイデンティティの希薄化についての危機感である」と言う。²³⁾在日の民族性が薄れていく主な原因としては定住化によるアイデンティティの多様化・多元化が挙げられる。現在の在日の中には、帰化や結婚により自分のルーツを抹消し「日本人」として生きることを決心した「同化志向タイプ」もいれば、帰化者たちの親睦団体である成和クラブのメンバーのように帰化後も「朝鮮半島系の日本人」として生きようとするものもいる。特に、最近では「朝鮮人」でも「日本人」でもなく「個人」として「トランスナショナル(transnational)」なアイデンティティを志向する「個人志向タイプ」の人たちが増えつつある。²⁴⁾

このような状況の中、彼／女らのナショナル・アイデンティティも当然変わっている。実際、在日3世たちは祖国について次のように述べている。

「南朝鮮をウリナラ(祖国)だと思ったことはありません…今まで南朝鮮と関わったことがなかったので、一応北朝鮮をウリナラだと思っています。とは言え、朝鮮総聯を支持しているわけではないし、北朝鮮に対する愛国心なんかありません。別に国が減んでも構いません…私にとってウリナラという概念は心の国籍、言わば故郷のようなものです。私の形式的な故郷は慶尚北道ですが、そこは私と関係ない場所です。私の故郷は千葉県です」

(朝鮮籍の在日3世、男)²⁵⁾

「私の故郷はこちら(日本)でしょう。韓国が故郷という考えはありません。なんとなく…韓国は私にとって外国です。けど本籍地があって、また私の先祖がそこから来たということを考えれば、外国であるけど「特別な外国」といえばいいのでしょうか？そんな感じですね」

(韓国籍の在日3世、女)²⁶⁾

多少極端な例であるが、上記の話から若い世代の祖国観が旧世代とは異なることが分かる。彼／女らは自分たちが置かれている現実と祖国をはっきり区別しているのである。

23) 前掲書、土屋明広(2008) p.18.

24) 前掲書、土屋明広(2008) p.19；原尻英樹(1989)『在日朝鮮人の生活世界』弘文堂、pp.90-96.

25) 권준희(2002)「재일조선인 3세의 '민족' 정체성에 관한 연구-조선학교 출신 '조선적'을 중심으로」연세대학교 대학원 석사논문, p.84.

26) 宋基燦(2001)「在日韓国・朝鮮人の「若い世代」の台頭と民族教育の新しい展開」『京都社会学年報』第9号、京都大学、p.242.

この映画でもそのような場面が描かれている。劇中、ソングが朝鮮学校の友達と居酒屋で飲んでいる時、偶然バイト先の友達(日本人)に会う場面で彼がバイト先では「木村(SMAPの木村からとっている)」という通名を使い朝鮮人であることを隠していることが分かる。彼はバイト先の友達にテソンとチョンボを稲垣と草薙だと紹介する。これに対してテソンが「木村君?なんだよそれ」と聞くと、ソングは「どーせバイトだし、チョーセン人という雇ってくれないところもあるしな…それに入った後通名の方が楽じゃん」と答えて一瞬二人の間には暗い雰囲気は漂う。チョンボはこの場をなんとかおさめようと「どーでもいいじゃん、どーせ俺たちはどっちつかずの人種なんだからさ。スパッとこいこうよ、スパッと」と言う。この場面は在日3世が祖国と日本のいずれかを求めるより、自分が置かれているその時々状況、あるいは他者との関係に応じて国籍を使い分けていることを表している。李洪章はこのような行為が若い世代の在日にとって日常的な行為だと言う。在日のナショナル・アイデンティティは場面によって排他的なナショナルなものであるが、広くみれば極めて「トランスナショナル」なものである。そのため、在日のナショナル・アイデンティティを論じる際、個人的アイデンティティと集团的アイデンティティを明確に分別し対置させるのは危険である。前者は可変的であり、後者はいちようで固定的であるという認識に基づきがちだからである。²⁷⁾すなわち、もう在日の若い世代は決して一枚岩な存在ではなく、フレキシブルなアイデンティティを志向しているのである。

このように、若い世代の在日のナショナル・アイデンティティは旧世代とは異なる。特に、彼／女らは祖国を民族や歴史という文脈のみで理解するのではなく、自分が置かれている生活空間や他者との関係によって流動的なものとして使い分けているのである。もう彼／女らにとって「コリア(祖国)というのは思い出でも郷愁でもない。単に記憶すべきルーツ、遠い昔祖父の時代の伝説に過ぎない」²⁸⁾のかも知れない。

3. マイノリティとしての在り方

在日3世になるとアイデンティティ問題は新たな局面を迎えることになる。1970年代以降から始まった定住化意識の拡散は3世のアイデンティティ構築に大きな変化をもたらした。2世まで

27) 李洪章(2010)「朝鮮籍在日朝鮮人青年のナショナル・アイデンティティ化連帯戦略」『社会学評論』第61巻第2号、日本社会学会、p.173.

28) 前掲書、신명직(2007) p.154.

は祖国と繋がっていた世代だと言えよう。それゆえに、朝鮮人としての民族性を維持し、日常生活でも朝鮮文化を守ろうとした。特に、彼／女らは日本／日本人に対し、歴史的な影響による反発という硬直した思考を持っていた。この映画でもテソンの姉が結婚相手として日本人の男を連れてくると、テソンの母は露骨に反感を表す。そしてテソンに「あなたは絶対チョッパリ(日本人)の女連れてくるな」と言うが、テソンはそれに対してなんの反応もしない。テソンにとって義兄が日本人であれ朝鮮人であれ関係ないのである。3世の場合、祖国との連帯を重視する祖国志向も日本への同化志向ももちえないため、より複雑なアイデンティティ問題を抱えている。このような3世たちのアイデンティティ問題はチョンボが野球部に入りたい理由をいう場面で如実に現れる。

チョンボ「この前さ、日本対韓国のサッカーの試合見たんだけど、やっぱ国の代表って格好いいわ。こう胸に手を当てて国歌なんか歌ってんの。もちろん韓国の国歌なんか知らないけどね。それでさ、試合もやっぱ韓国応援しなきゃって思うんだけど、熱が入ってくるとどういいうわけか日本応援しちゃうのよ。不思議と。ていうか韓国の選手なんて誰一人知らないじゃん。日本の選手の方が愛着湧いちゃうんだよな。あ！話変わるけどさ、この前韓国旅行行ったのよ。親戚大勢で、オレ全然自分の国だなんて思えなかったな。祖母ちゃんとかワーワー泣いてんだけどさ。あ！そうなんだよ。向こうの奴がまたむかつくんだ。オレの従妹、日本の学校行ってるから言葉全然しゃべれないわけよ。そしたらお前なんか韓国人じゃない、日本人だ！なんて言われちゃって。しまいには言葉の分かるオレにまでパンチョッパリと呼びやがって、本当頭に来たよ…日本ではチョーセン人と言われて、あっちいけば日本人呼ばわりされて、俺たちって一体なんなんだろうな」(下線筆者)

(00:15:34~00:16:20)

ここで「日本の選手の方が愛着湧いちゃうんだよな…日本ではチョーセン人と言われて、あっちいけば日本人呼ばわりされて、俺たちって一体なんなんだろうな」から分かるように3世たちは、旧世代より更に日本に密着して生きているため、祖国と日本どちらにも帰属できない曖昧な自己アイデンティティの葛藤を経験するのである。在日の女性学者金榮(김영)は「日本も韓国も北朝鮮も文化と民族性を国民性と同一化したがる国ではあるが、在日はその三つの国と自分を完全に同一視することはできなかった。そのため、自分のアイデンティティを曖昧なものに見做し、どこの国にも自分を帰属させられない精神的な不安を抱えている」²⁹⁾と言う。特に、日本で生まれ育った在日2、3世の場合、そのような不安が顕著に表

れる。何より彼／女らには祖国と故国そして母国が一致しない問題が生じるのである。田中勝彦によると、祖国は先祖の出身地、自分のルーツ(roots)である。そして、故国は自分が生まれた故郷(native place)であり、母国は国民として所属した国(nation, state)である。30)一般的にこの三つは一致するのだが、劇中の彼らにとってこの三つは一致しない。例えば、チョンボの祖国は朝鮮であり、故国は日本、母国は韓国である。また、彼のような3世は2世より民族性が薄れているため、どちらかに自分を同一視することは極めて困難である。

このようなアイデンティティの曖昧さは日本社会での彼／女らの呼び方にも表れる。戦後日本では戦前の「朝鮮人」を「在日朝鮮人」と呼ぶようになり、韓国との国交正常化を機に韓国籍者と朝鮮籍者を「在日韓国人」と「在日朝鮮人」に区別した。その後両方を総称する「在日韓国・朝鮮人」に変わり、最近では韓国と朝鮮をより総合的で簡潔にする「在日コリアン」と呼ぶようになっている。また、しばしば金城一樹が自分の作品『GO』で意識的に用いた「コリアン・ジャパニーズ」と呼ぶこともある。これは祖国、民族、統一からの離脱を志向する3世たちを表しているが、直訳すると「朝鮮系日本人」という意味で「日本人」という言葉に抵抗があるため使う者は多くない。一部ではこの呼び方に対し、母国語ではない英語を使うことによって呼称に関する問題が一応解決されるように思われるが、生活文化に浸透していない英語は言葉の意味をぼかし、その解釈を曖昧なニュアンスに委ねているという指摘もある。31)このように日本社会での在日の呼び方は多様化され複雑さを増しているが、この中で劇中チョンボのように祖国と日本どちらにも帰属できない3世たちを表す適切な言葉は未だにないのである。

原尻秀樹は、多様化・多元化される在日朝鮮人のアイデンティティのバウンダリーを次のように分類している。①韓国人、②北朝鮮人、③祖国の「朝鮮人」、④在日朝鮮人、⑤帰化者Ⅰ大韓民国系日本人、⑥帰化者Ⅱ朝鮮半島系日本人、⑦帰化者Ⅲ北朝鮮系日本人、⑧帰化者Ⅳ日本人、⑨自由人、国際人、その他である。彼は、最近⑧グループが増加³²⁾することの反動として④の在日朝鮮人と⑨自由人、国際人などに自

29) 김영(2003)「조선적으로 산다는 것」『여성과 평화』 제3호, 한국여성평화연구원, p.148.

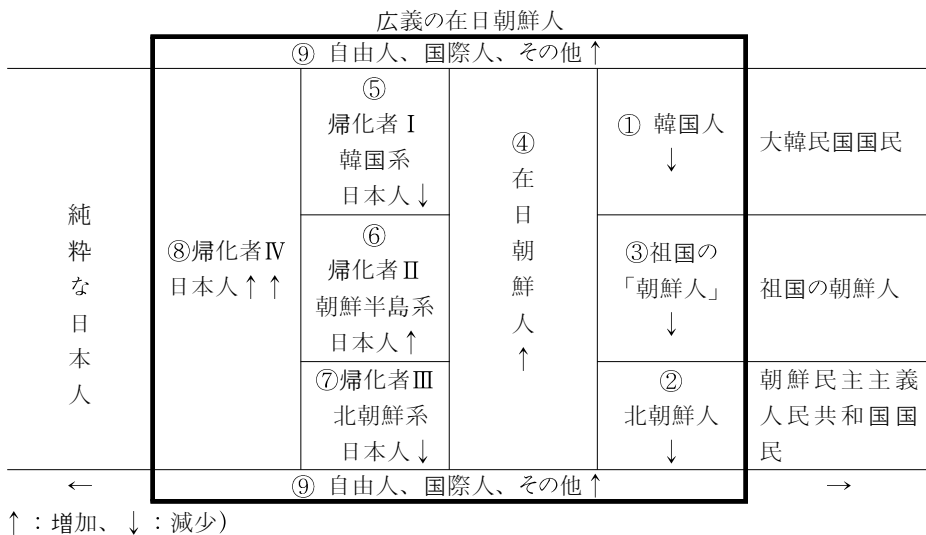
30) 서경식(2009)『고통과 기억의 연대는 가능한가? - 국가, 국민, 고향, 죽음, 희망, 예술에 대한 서경식의 이야기』 철수와 영희, p.37.

31) 高原知愛(2001)「在日コリアン三世のアイデンティティ創出に向けての提言」『第2回関西学院大学J.C.C. Newton賞』、関西学院大学, p.5.

32) 日本法務省によれば、50年代から80年代にかけて年平均3,000～5,000人前後だった在日の帰化許可数が90年代から増え始め、93年に初めて1万人を突破、以後毎年1万人前後が帰化をしたが、2011年からは年平均並みの5,000人前後が帰化している。2017年までの帰化許可者数46,932名のうち、在日は最も多い41,151名を占め

らを定位する人々が増加すると予測している。ここで④の在日朝鮮人というのは、朝鮮という祖国をよく知らないという自覚と本国の朝鮮人とは諸々同じ点ではないが、国籍、姓名などによって自分が朝鮮人であることを自覚せざるを得ない人々で、主に2、3世の世代が多い。また、⑨の自由人、国際人は①～⑧までの中に属さず、朝鮮半島の影響による政治レベルで無関心であり、かつ⑧などの自覚のない人々で、主にダブルなどがこれに該当する。33)

図2. 在日朝鮮人のアイデンティティの動態性



出所：原尻英樹(1989)『在日朝鮮人の生活世界』弘文堂、p.95の図10.

このように在日のアイデンティティは多様化・多元化されているが、旧世代に比べ3世たちのアイデンティティの衝突や各種運動体の活動などはなかなか表面化されなかった。事実、2世に比べ3世のアイデンティティ問題を扱った芸術テキストはそれほど多くない。34)その理由としては、何より3世たちのアイデンティティ問題意識の鈍化傾向が指摘されている。すなわ

ている。http://www.moj.go.jp/content/001180510.pdf(検索日2019.03.14.)

33) 前掲書、原尻英樹(1989) pp.89-97.

34) 例えば、在日文学の3世代の作品の場合、旧世代の作品に比べエスニック・アイデンティティ問題がはっきりと描かれていない。3世代の作品は、在日という条件を言語と人間存在の意味、あるいは家族の崩壊による個人の孤独という普遍的な問題として提示する特徴がある。유숙자(2002)『在日 한국인 문학연구』 도서출판月印, p.157.

ち、3世たちが自分のアイデンティティを求めることに對し不安や葛藤回避が続き、結局アイデンティティ問題を自分の問題として捉えられなくなるのである。³⁵⁾

しかし、この映画の主人公たちは、曖昧な自分の存在に悩まされても在日であることを決して否定しない。彼らは在日である自分自身を受け入れ、新たなアイデンティティを構築する。映画のエンディングの甲子園の地域予選試合で大勢の人で埋まった観客席をみてテソンとソングは次のように言う。

ソング「すげえーな、オレ今日ほど自分がチョーセン人って思われた日はないよ」

テソン「やめたいか？ チョーセン人」

ソング「馬鹿野郎。オレは生まれ変わってもチョーセン人でいいよ」

テソン「そーだよな。なっちまったもんしょうがないからな」

テソン「関係ねえよ。オレはオレだ」

(00:50:56～00:51:50)

この場面について監督の李相日は「朝鮮高校に通っていた時の自分と大学入学後日本社会に編入されていった自分の間で生じた葛藤の産物である。両方に属することも属さないこともできるという意味で理解してほしい」³⁶⁾といいながら「大切なのは在日はやはり日本人とは違うことを知り、日本社会の中で<個>というものの確立に生きがいを持つことだ」と言う。³⁷⁾自分が朝鮮人であることから生じる葛藤を回避せず、しっかり自覚し、個を中心においた在り方の確立が大切だということである。

この映画は原尻英樹が主張するバウンダリーの中で、自分が朝鮮人であることを自覚せざるを得ない在日朝鮮人と祖国に無関心な自由人の間のどこかに位置する在日3世のアイデンティティの葛藤を描いている。現実を生きる若い世代の在日は日本への抵抗と祖国の選択などの問題からは離れているが、自分が朝鮮人であることを否定できない存在であり、大事なことはマイノリティである自分をプラスに活かすか否かは自分次第であることを主張している。

35) 前掲書、高原知愛(2001) p.6.

36) 前掲書、신명직(2007) p.165.

37) 『세무리』(2000)、p.35；前掲書、梁仁實(2003) p.114-115 再引用。

4. おわりに

本稿では在日3世である李相日が朝鮮学校を舞台として製作した映画「青～CHONG G～」から3世の自己アイデンティティを考察してみた。特に、彼／女らが祖国をどのように思い、また日本社会で自分をどのように位置づけて自己アイデンティティを構築するのかを読み取ることを試みた。

2000年以降韓国社会では、それまで隠蔽されてきた朝鮮学校に関する多くの映像テキストが製作された。これらの大半は日本社会の差別の中、誇らしき民族性を持ち逞しく生きている在日の姿を描いているが、このような表象はあくまで韓国側を中心に在日を祖国愛あるいは民族愛を高める対象として扱う傾向がある。実際、朝鮮学校を経験した在日3世が書いた小説や自己表現映画などでは民族教育を拒み、自己アイデンティティ問題で苦悩する姿がよく描かれている。

本稿で注目した映画「青～CHONG～」でも、そのような彼／女らの姿が多く描かれている。劇中、主人公テソンが社会の授業中に金日成の肖像画の草紙紙で顔の脂を拭き取ったり、親友ソングが朝鮮企画(北)という紙のミサイルを作って発射するなどの場面は、もう彼らのナショナル・アイデンティティが旧世代が思っていた概念とは異なることを端的に見せている。特に、ソングはバイト先で通名を使い自分が朝鮮人であることを隠している場面から国籍というのは、自分が置かれているその時々状況に応じて使い分けできるトランスナショナルなものであることを示す。

在日のアイデンティティにおいて2世までは祖国と民族という言葉のもとで構築されたが、1970年代からの定住化意識の拡散によって3世のアイデンティティは旧世代とは異なる傾向を見せている。劇中、チョンボが韓国と日本のサッカーの試合で韓国を応援しなきゃと思いつつも、熱が入ると日本を応援してしまう自分の不思議な感情をいう場面などは祖国と日本どちらにも帰属できない3世たちの曖昧な立場を表している。3世たちは旧世代より日本社会に密着して生きているため、複雑なアイデンティティ問題を抱えているのである。しかし、今まで3世のアイデンティティ問題はなかなか表面化されなかった。事実、2世に比べ3世のアイデンティティ問題をテーマとした芸術テキストはそれほど多くない。その原因としては、葛藤回避による鈍化傾向が挙げられる。そのため、3世たちがアイデンティティ問題を自分の問題として捉えられなくなったのである。しかし、この映画ではそのような問題を回避せず、まっすぐに向き合う。劇中、彼らは自分が朝鮮人であることをしっかり自覚し、日本社会の「マイノ

リティとしての在り方」を志向する。更に、それをプラスに活かす否かは自分次第であることを主張する。

今まで在日のアイデンティティの変容に関して様々な視点からの研究が先行されてきた。特に、若い世代が祖国との連帯を重視し、民族アイデンティティを維持する「祖国志向」なのか、それとも民族や国家、祖国統一などに拘泥せず、「個人」を中心に置いての生き方を模索する「個人志向」なのかなどについて多く論じられてきた。本作はそのような研究に一つの答えを提示していると言えよう。もちろん、この映画が発するメッセージが全ての若い世代のアイデンティティを代弁することはできない。しかし、偏狭な民族教育を率直に批判し、更に3世たちの自己アイデンティティが旧世代とは異なる形で再構築されることを事実的に描いた本作は、映像テキストにおける在日の表象研究に重要な意味を持つ。今後在日3世以降の自己アイデンティティ問題は、従来の枠組みでは捉えられないほど変容されていくと思われる。それについては、多様な映像テキストを通して改めて論じていきたい。

【参考文献】

- 권준희(2002) 「재일조선인 3세의 ‘민족’ 정체성에 관한 연구 - 조선학교 출신 ‘조선적’을 중심으로」 연세대학교 대학원 석사논문, p.84.
- 권혁태(2007) 「재일조선인과 한국 사회 - 한국 사회는 재일조선인을 어떻게 표상해왔는가」 『역사비평』 제78호, 역사문제연구소, pp.234-267.
- 김영(2003) 「조선적으로 산다는 것」 『여성과 평화』 제3호, 한국여성평화연구원, p.148.
- 서경식(2009) 『고통과 기억의 연대는 가능한가? - 국가, 국민, 고향, 죽음, 희망, 예술에 대한 서경식의 이야기』 철수와 영화, p.37.
- 신명직(2007) 『재일코리아 3색의 경계를 넘어』 고즈윈, pp.165-166.
- 유숙자(2002) 『在日한국인 문학연구』 도서출판월인, p.157.
- 윤건차, 박진우 외 역(2016) 『자이니치의 정신사 - 남·북·일 세 개의 국가 사이에서』 한겨레출판, pp.608-609, p.774, pp.766-767.
- 이승훈(2006) 「일본에서 ‘재일한국인’으로 살아가기」 『현상과 인식』 제30권 제1호, 한국인문사회과학회, p.84.
- 조경희(2007) 「한국사회의 재일조선인 인식」 『황해문화』 제57호, 새얼문화재단, pp.59-62.
- 지충남(2018) 「재일한인의 민족정체성에 관한 연구」 『로컬리티 인문학』 제19호, 부산대학교 한국민족문화연구소, p.17. (DOI:http://dx.doi.org/10.15299/tjl.2018.04.19.7)
- 金有燮(2016) 「朝鮮學校ではどのような教育を行われているのかー民族教育と地域共生の取り組みについて」 『第41回GCI講演会報告』、神田外語大学グローバル・コミュニケーション研究所, p.26.
- 宋基燦(2001) 「在日韓国・朝鮮人の「若い世代」の台頭と民族教育の新しい展開」 『京都社会学年報』第9号、京都大学, p.242.
- 高原知愛(2001) 「在日コリアン三世のアイデンティティ創出に向けての提言」 『関西学院大学 第2回 J.C.C.Newton賞』、関西学院大学, pp.5-6.

- 趙慶喜(2009) 「韓国社会における在日朝鮮人認識の変遷」 『クヴァドランテ』 第11号、東京外国語大学海外事情研究所、pp.115-131.
- 曹慶鎬(2013) 「在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティの多様化に関する調査研究－日本学校在学生と朝鮮学校在学生の比較を中心に」 『多言語多文化－実践と研究』 第5号、東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター、p.103.
- 土屋明広(2008) 「日本社会における在日アイデンティティ(被)構築性－アイデンティティ構築における法的支援に向けて」 『岩手大学教育学部年報』 第68巻、岩手大学教育学部、p.10, p.18, p.19.
- 原尻英樹(1989) 『在日朝鮮人の生活世界』 弘文堂、pp.89-97.
- 福岡安則(2008) 『在日韓国・朝鮮人－若い世代のアイデンティティ』 中公新書、pp.88-107.
- 水野直樹、文京洙(2015) 『在日朝鮮人－歴史と現代』 岩波書店、p.200.
- 梁仁實(2003) 「戦後日本の映像メディアにおける「在日」表象－日本映画とテレビ番組を中心に」 立命館大学大学院博士論文、p.113.
- 李洪章(2010) 「朝鮮籍在日朝鮮人青年のナショナル・アイデンティティと連帯戦略」 『社会学評論』 第61巻第2号、日本社会学会、p.173. (<http://dx.doi.org/10.4057/jsr.61.168>)
- ウィキペディア、鄭大世：
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%84%AD%E5%A4%A7%E4%B8%96>(検索日：2019.03.06.)
- 日本法務省民事局、帰化許可申請者数、帰化許可者数及び帰化不許可者数の推移：
<http://www.moj.go.jp/content/001180510.pdf>(検索日：2019.03.14.)

논문 투고 일자 : 2019. 04. 14.
논문 심사 일자 : 2019. 05. 03.
게재 확정 일자 : 2019. 05. 07.

<要旨>

映画「青～CHONG～」からみる在日朝鮮人3世の自己アイデンティティ

朴東鎬

本稿は、在日3世の李相日(リ・サンイル)の映画「青～CHONG～」から在日3世の自己アイデンティティを考察したものである。李相日が日本映画学校の卒業製作として作った本作は、民族的マイノリティとして浮遊する在日の苦悩を描いた既存の自己表現映画とは異なり、朝鮮学校の生徒たちを通して3世たちの曖昧で複雑なアイデンティティ問題を事実に収めている作品として高く評価されている。しかし、独立路線で製作されたため、一般にはあまり知られていない。従って、本稿ではこの作品に注目し、映画に再現された在日3世のアイデンティティを考察した。特に、旧世代より日本社会に密着して生きてる3世たちが祖国をどのように思っているのか。また、自分をどのように定位し自己アイデンティティを構築するのかを探った。このような作業を通して、今まで韓国側を中心に置いて製作された映像テキストとは異なる視点で彼/女らを理解すると共に、なかなか表面化されなかった3世の自己アイデンティティ問題を想起させる機会を提示することを試みた。

Self-identity of third generation Zainichis from the viewpoint
of the movie “Blue～CHONG～”

Park, Dong-Ho

This study reviewed the self-identity of third generation Zainichis through the movie “Blue～CHONG～”, which was produced by Lee, Sang-Il, a third generation Zainichi, as part of his graduation work at the Japan Institute of the Moving Image. This movie has been highly regarded as realistically representing the ambiguous and complex issue of self-identity among third generation Zainichis through the life of Joseon school students. This is distinct from other movies portraying the agonies of the Zainichis, an ethnic minority. However, this movie has not gained popularity among the public as it is an independent film. Third generation Zainichis are more closely connected with the Japanese society than their former generations. I studied how they perceive the “Nation” and how they define themselves to develop self-identities. This work helps understand third generation Zainichis with a perspective different from text images produced by the Korean’s position, while also working as reminder of the third generation Zainichi’s self-identity issue which has not come to the fore.